

送る言葉

ご卒業お目出度うございます。このお祝いの言葉を、皆さん方はもう何度も聞かされたことでしょう。実は、私も皆さん方と同じくこの三月、立正大学を後にします。皆さん方は四年間の学業が成り、私は四〇年間の勤務が終り、皆さん方と同じく立正大学を巣立ちます。皆さん方は感無量でしょう。私も同感です。

思えば、この言葉にならない感無量という感情を、私たちは、人生のそれぞれの段階で味わってきたのではないのでしょうか。小学校を卒業する時も、中学、高校を卒業する時も、そして今、大学をこうして巣立って行く時も。皆さんいかがですか。小学校を卒業する時の感無量はなつかしさで一杯だったのではないのでしょうか。中学や高校を卒業する時の感無量は、勉強やスポーツであいつに負けてくやしかった、あるいはクラスのマドンナに思いが通じなかったといったチョッピリ苦い思いが込められた感無量なのではないですか。今、本学を卒業して行くに当たっての感無量の内容はどんなものですか。

四〇年の勤めを終えるに当たって、私の感無量は、実は、私の小学校を卒業するに当たっての感無量と同質のものだったということに、今、私は気付き始めています。中学や高校の卒業の時の感慨とはどうやら同じものではなさそうです。少し時間をいただいで、私の小学校時代の思い出を話させて下さい。

私は、太平洋戦争の始まる一年前の昭和十五年に、福島県のさる中都市の小学校に入学し、敗戦後の昭和二二年春

に卒業しました。時代が時代だったので勉強した思い出なんか持っておりません。防空壕掘り、土嚢づくり、避難訓練、更には攻撃訓練（竹槍での突撃）の毎日でした。もちろん、悪ガキだったので、それらの軍事訓練の合間にもしょっちゅう悪ガキ連中とワルサをして遊んでいたものです。悪ガキ連中とのワルサといたって、当時の小学生ですからたかが知れています。学校から禁止されていたベーゴマを競い合う、ビー丸遊ゴマびで小さなカケゴトをするといった遊びです。ですが、何故か見つかったら、担任の先生にしかられた記憶がありません。何と私たち悪ガキの遊び事を見つければ、どなりつけ、手帳に名前を書いて学校に知らせるぞと脅したのは、オマワリさんでした。私なんかドジでしたから、何度、オマワリさんの手帳に名前を書き留められたことか。ですから、当時の悪ガキ連中はオマワリさんの姿を見ると、一斉に逃げ出したものです。オマワリさんから通報を受けたはずの小学校の担任の先生は、私たち悪ガキに何にも言いませんでした。皆首をすくめて先生の小言を待っていましたのに。

私たち悪ガキをつかまえたオマワリさんは、アメリカ、イギリスとの戦争がますます激しくなり、連戦連勝の日本軍の留守をあずかるお前たち少国民（当時、小学生を少国民と呼んでいました）が、この有様ではマコトニナゲカワシイといつて、ひとくさりのお説教をたれるのが常でした。ですが、そんな悪ガキの私たちも、アメリカのB29爆撃機やグラマン、ロッキードといった艦載機が度重ねて襲いかかってくるようになると、オマワリさんの言う日本軍連戦連勝なんて話を、まともに信ずる者はいなくなりました。多くの悪ガキ連中の父や兄が戦死し、白木の箱の葬送の長い列が街を通る度に、戦局は容易ならざるところに來ているのだなということを、小学生ながら悪ガキ連中も知っていました。

遂に昭和二〇年春、敗戦まであと半年という時期に、私たち悪ガキ連中の担任の先生に召集令状がきました。私たち悪ガキ連中もこぞって担任の先生の出征を町の中央駅まで見送りに行きました。担任の先生は、その時、見たこと

もないようなりしい軍服に身を固めていましたが、顔はいつもの温顔でした。先生の周りにワーと集まった悪ガキの頭を、先生は名前を呼びながら一つ一つなでてくれました。と、何としたことか、私たち悪ガキ連中はみんな声をあげて泣き出してしまったものです。私も泣きました。何故だかわかりません。小学校高学年ですから、硫黄島がどうなったか、サイパン島がどうなったか、沖繩戦がどうなるか、分らないわけはありません。きっと先生も白木の箱に入って帰ってくる、これが最後の別れだ、と、そんな思いで泣いて先生にすがったのでしよう。そこに、何と憲兵将校がとんできて、私たちをドナリつけ、私たち悪ガキと先生を引き離してしまいました。「帝国軍人の栄えある出征を泣くとは何事か!!」というのです。私たちはその憲兵将校を恐ろしいと思い、かつ、心の底から憎みました。やがて列車に乗り込んだ先生は、最後尾のデッキから私たち悪ガキに向かって、いつまでもいつまでも手を振ってくれていました。今から六〇年ほど前の、今もって消え去らない思い出です。

茫々たる六〇年の昔、私の心に残る小学校の思い出はこれに盡きます。先生のために心の底から涙を流した思い出です。あれから数十年を経て、郷里に帰り、私の出た小学校の前を通る度に、あの日のことが思い出されます。人づてに聞いたところ、あのやさしかった担任の先生は、やはり生きてはお帰りになれなかったそうです。私は、やがて中学、高校へと進学しました。しかし、同級生たちはライヴァルではあっても、友トモではありませんでした。勿論、中学、高校の先生たちの中にも交通事故で亡くなられた方もおられました。しかし、失礼ながら、お気の毒とは思っても、涙を流すほどではありませんでした。大学でも同じです。大学でも私の専攻領域に近い二、三人の先生が亡くなりました。そのうちのお一人は行方不明のまま亡くなられた先生もおられ、私も搜索の費用をカンパして協力しましたが、私の対応はそこまででした。大学の同級生は中・高のそれ以上にライヴァルであり、論争の相手であり、とても友トモと呼べるような人たちではありませんでした。

こうして、私は大学、大学院と進み、今から四〇年前に、本学の専任講師に採用されました。私を採用して下さいた先輩の先生方は、私の悪ガキ體質を十分知った上で採用して下さいたのでしよう。私は、本学だけでなく日本の大
学全体の持つ古い體質にことごとく嘸みつきました。それも先輩教授や同僚教授に対してばかりでなく、皆さん方の
先輩たちとも本気になってドナリ合い、本気になってイカリ、事が成らなければ本気になってラクタンしました。こ
の間、教員としての勉強の方はどうであったかといえますと、どうもこちらの方はイマイチであったかと思ひます。
皆さん方も、四年間の勉強はどうだったかと聞かれると、やはり、どうもイマイチであったかと思ひます。かたが
多いのではないでしょう。私はそれでいいんだと思ひています。生きた勉強はこれからなんですから。

私の四〇年間の勉強はイマイチでしたが、先ほど述べた皆さん方の先輩たちとの本気になってのドナリ合い、本気
になってのイカリ、本気になってのラクタンの体験は、今やなつかしさで一杯ですし、感無量という言葉でしか言い
表わせません。皆さん方の先輩とだけではなく、私の先輩教授、同僚教授との感情むき出しのぶつかり合いも感無量
です。その代り、それらの人々が志なればで病に倒れ、帰らぬ人になられた時は、心の底から悲しみました。例えば、
私の敬愛してやまなかつた元学長が亡くなられた時など、ご遺族の前で私の醜態をお見せしたくなく、しばらく顔を
あげられなかつたほどです。本学における私のこの感無量の体験は、私にとって小学校時代のあの感無量の体験とまっ
たく同質のものです。

こう述べたからと言って、現代の大学が小学校と同質のものだなどと言おうとしているものではありません。本当の
ところ、ヨーロッパの中世末期、教育施設が立ち現われたのは、大学が先であり、小、中、高の学校が立ち現われた
のは、それから数百年も後のことです。では、先に立ち現われた大学では何を教えていたんでしようか。まず、読み、
書きから教えていたんです。もっともそれはラテン語でしたが。当時の大学生たちは、したがって、きわめて素朴で

あり、乱雑でもあり、手に負えない大人子供オトナコドモでした。その代り、当時の大学では、古い権威や厳しい戒律に対するむき出しの感情、むき出しの情念が渦巻いていました。やがて、これらの情念はルネッサンス、宗教改革期に爆発します。しかし、数百年後、小学校ができ、中学、高校が整備された上に大学が位置づけられるようになると、事情はまったく異なってきます。大学は、初等中等教育で教養を築いた上の教育機関となり、既成の知識やら新知識の伝達機関、スマートな紳士の養成機関となりました。そして、大部分の大学で学ぶことの何かが失われてきました。

私が立正大学の四〇年間で感じてきたものは、もしかすると近代の大学教育で失われた何かであったのかも知れません。皆さん方は、多分、この四年間、われわれ教員側が用意した知識の体系をよそ目に、今学んでいることは何の為か、どう生きて行こうか、生きて行く上に今の勉強は何の意味をもつのか、といったことで悩み続けられたことだろうと思います。時として、それらの悩みが友人たちとの軋轢アツレキともなり、衝突にもなり、時として、多少なりとも粗野な振舞いになったこともあったろうかと思えます。私はそれでいいんだと思っています。スマートに整備された現在の知識の体系だって、本来はそのような感情、情念に基づくさまざまな体験、経験を経た上で整備され、構築されてきたものなんですから。

わが立正大学は、他大学に比べて、まだまだこのような体験、経験となる以前の原―体験を残しているやに思われます。私が小学校時代に味わった体験以前の原―体験のようなもの、その後の私の体験、経験を基礎づけたような何かです。皆さん方が、このような思いや原―体験をい দিয়ে 巣立って行かれるように、七〇才になった私も同じような思いをい দিয়ে 巣立って行きます。これから五年後、いや一〇年後、皆さん方が立正大学での原―体験を基に、どのような体験、経験を積み重ねて行かれるか、楽しみです。私も七〇才で人生が終わったなどと思いたくありません。生命イノチある限り、立正大学での四〇年の原―体験を基に、私もまた私の人生経験を積み重ねて行きたいと思えます。

「さようなら」「ごきげんよう」とは言いたくありません。五年後に、またあの小高い谷山ヶ丘で、あるいは武蔵野の風情の残る熊谷の森で会いましょう。谷山ヶ丘の前を流れる目黒川は、少し上手カミテに行けば美しい桜並木が続きます。熊谷の森も美しい桜並木が続きますよね。あの桜並木の下で、皆さん方の五年間の体験、経験をお聞かせ下さい。私もまた私の体験、経験を語りましょう。生命イノチあれば、一〇年後もまたお会いしたいものです。その時、私は、ツエを ついてでも、美丈夫ビジョウブとなられた皆さん方の前に立ち現われたいものです。そして、語りましょう。皆さん方と私の経験を、皆さん方と私の生きざまを。そしてわれらが心の古里フルサト、立正大学を！熱い熱い思いを込めて！！

Auf wieder-wieder sehen!

再び 再び

合いまみえる日の

あらんことを。

二〇〇四年 三月二十三日

教授を名乗る最後の日

立正大学文学部教授

清水多吉

謹言